2012
FIWC Kyushu
Philippine Camp Report

BRGY Masaba Ⅱ, Matag-ob, Leyte, Philippines

February 21th – March 25th

2012 年春 FIWC 九州フィリピンキャンプ発行

目次

1. はじめに・・・・・・・P２

2. FIWC 九州とは・・・・P３

3. 重要人物紹介・・・・・P４

4. ワーク地、訪問地・・・P５

5. 活動日程・・・・・・・P６

6. ワーク報告・・・・・・P７～P１３

7. 係報告

⑴ KP ・・・・・・・・・P１４～P１５

⑵ イベント・・・・・・P１６～P１９

⑶ 会計・・・・・・・・・P２０～P２２

⑷ 保健・・・・・・・・・P２３

⑸ ホームステイ・・・・P２４～P２６

8. 生活状況・・・・・・・P２７～P２９

9. T シャツ・・・・・・・P３０

10. 他己紹介・・・・・・・P３１～P３５

11. 感想・・・・・・・・・P３６～P４６

1　はじめに

マサバ村はマタグオブ市の端にある山奥の村だった。周りにはココナッツの木、夜になれば満天の星空が広がる。2011 年夏、初めてマサバ村を訪れたとき、まさかこの村でワークをするとは思いもしなかった。今考えると必然だったのだろうか、あらゆる偶然が重なりマサバがワーク地に決まった。挨拶に行ったとき、村からの歓迎っぷりに少し圧倒されてしまった。今まで多くの村を見てきたが、マサバほど FIWC のプロジェクトを望み、そして村人が温かい村はなかった。

そして 2012 年春、私たちは新たなキャンパーを加え、再びびこの村を訪れた。

今回のキャンプテーマは　「絆～walk hand in hand」

日本人とフィリピン人、手を取り合って共に手を取り合い、お互いに深い関わりを持てるようにという意味が込められている。

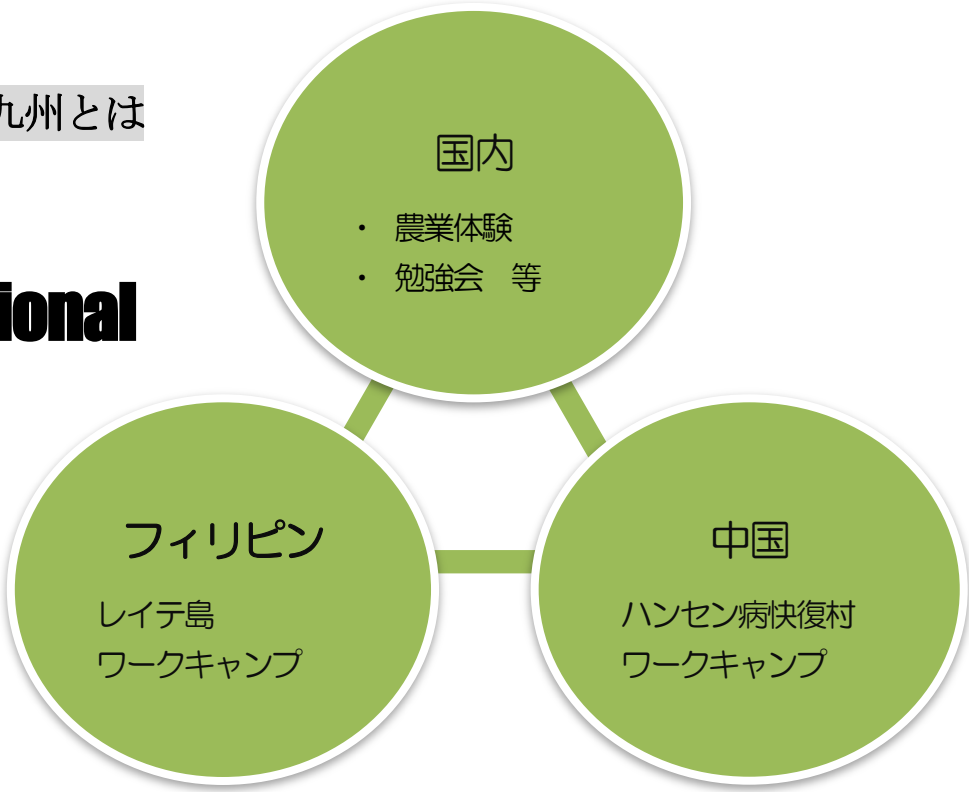
日本にいる間、私たちは毎日のように携帯電話やパソコンを一日中眺め、SNS を通して人とつながる。人と人との関係性が薄い。だからこそ、私たちはフィリピン人の大らかで陽気な性格に敷かれるのだろう。そして何より家族思いである。そこで私たちは人の温もりや人間らしさを身に染みて感じる。

「絆」は作ることが目的ではなく、後からついてくるものだろう。私たちはマサバの村人ともに本当に濃い一ヶ月を過ごした。笑い、泣き、汗を流し・・・それを一言で表すことはできない。しかしお互いにとって決して忘れることのない、かけがえのない一ヶ月間の思い出である。それが私たちとマサバの村人との「絆」なのだと思う。

2012 年フィリピンキャンプリーダー　青木雅詠

2　FIWC 九州とは

Friends International Work Camp



FIWC九州は九州（主に福岡）の大学生が主体となり学生のみで国内外で国際協力活動を行っている学生NGO団体です。

国際活動

◆　中国キャンプ

ハンセン病快復村へ行き、村人のケアやインフラ整備を中国の大学生と行う。

◆　フィリピンキャンプ

フィリピンレイテ島の貧困村を訪れインフラ整備を村人と共に行いながら交流を図る。

国内活動

◆　耶馬渓キャンプ 年3回大分県の耶馬渓で農業体験を行っている。

◆　FP(FIWC Party)

月 1 回第 4 土曜日に「びおとーぷ」で行うワークショップ形式の勉強会。

他にも自由な発想で自由な活動を行っている柔軟さが FIWC 九州の特徴です。 また、FIWC は九州の他、関東、関西、東海、広島に支部があり、互いに情報交換を行いながら、それぞれが自立した活動を行っています。

★キャンプメンバーだけでなく国内活動にも一緒に参加してくれる大学生を募集中!!★

FIWC 九州 kyushu

3　重要人物

【現地エンジニア:ロクロクさん】

1994 年から FIWC 関東の活動に参加、2004 年からは FIWC 九州の活動に参加してくれている現地のエンジニア。ビサヤ語と英語を話し、FIWC・日本人に深い理解があるため、新しい村でワークするときなどに、私たちに代わって FIWC のことを説明してくれる。ワーク以外でもフィリピンの文化や言語などを教えてくれ、本当にお世話になっている。FI 九州のキャンプにはなくてはならない存在。

【マサバ II 村の村長:ピロ】

今回ワークした村、マサバ村のカピタン（村長)。とても大らかで、おちゃめな村のお父さん的存在。常に我々日本人ことを気遣ってきれた。お酒が大好き。夜会いにいくとすでにホボック（酔っぱらい）になっていて話を聞いてくれないこともしばしば…。せっかく夜話し合ったのに、翌朝覚えていないときもあった(笑)。

【坂本実玲さん　通称:Merry】

青年海外協力隊の派遣により、2010 年秋からマタグオブ市の市役所に滞在している日本人。2011 年春キャンプから FIWC 九州と交流がある。我々が日本にいる間、現地⇔FIWC 九州の仲介役として様子を見に行ってくれたり、その報告をしてくれたりと大変お世話になった。キャンプ中は GAM やワークにも参加してくれた。そしてビサヤ語の達人…♪辞書やお菓子の差し入れ、本当に有り難うございました!!

【North Western Leyte Development Parent's Association Inc. 通称:NorWeLeDePAI】

FIWC 九州と 2004 年の下見から協力体制をとっている現地の NGO 団体。FIWC 関東とも協力しており、フィリピンワークキャンプでは重要な存在である。この団体はレイテ島北西部の村々で、子ども達の両親が中心となってコミュニティの発展を目指す活動を行っており、世界的な NGO、World Vision のドイツ支部から資金援助を受けている。

2011 年 9 月からオフィスがオルモックから車で 15 分ほど離れたルナ村に移転した。マサバはノルウェルのカバーエリアではないため、主に貴重品管理でお世話になった。

４　ワーク地、訪問地紹介

Masaba Ⅱ村　今回のワーク地。人口９００人ほどののどかな山村。マタグオブの中心地からも遠く、雨が降れば道が悪くなるため交通の便はあまり良くない。しかし山奥のため見晴らしがよく、夜になれば星空は最高！主な産業はココナッツとアバカ（マニラアサ）。見た目はバナナの木に似た植物で、アバカファイバーを紡ぐお母さんの姿が各家庭でよく見られた。ちなみに丈夫なアバカの繊維は日本の紙幣の原料にも使われている。

Matag-ob 市　マサバ村が所属する町。フィリピン南東の島、レイテ島の西側に位置する田舎町。オルモックからバスで１時間半ほど離れている。中心にはマーケットなど様々な店が立ち並んでいる。その一方で山間部に位置する村は水道や生活環境が整っていないことが多く、周辺の町と比べても最も貧しい町の１つである。FIWC 九州は過去５年間この町でプロジェクトを行っている。今では我々の活動が浸透しつつあり、日本人への理解が深まっている。今回のプロジェクトは、市・村・FIWC の共同でのプロジェクトという形であった。

Ormoc　レイテ島西部で一番栄えている港町。街中には大きなスーパーマーケット、大きな病院、銀行、郵便局など、必要なものはすべて揃っている。フェリー乗り場、大きなバスターミナルもあり、オルモックからレイテ島の各町へバスが出ている。

Masaba Ⅰ村　マサバⅡの隣村で、マサバⅠは隣パロンポン市に所属する。パロンポン市はレイテ島西海岸の港町で、マタグオブよりは大きい中間程度の町。元々１つの村だったが 1957 年に分割され、マサバⅡがマタグオブ所属となった。今でも繋がりは強い。休日には闘鶏を見にいく人もいた。ワークの打ち上げでは村から歩いて１時間ほどのマサバⅠの滝壷でリバーパーティを行った。

Cebu　フィリピン中部のビサヤ諸島にあるセブ島。マニラ首都圏に次ぐ大都市圏。キャンプでは隣のマクタン島にあるマクタン・セブ国際空港から出入国し、空港施設内にあるシランガンホテルに宿泊。またマンダウエにあるイミグレーションでビザを取得、最終日にはセブ港近くのSMという大きなデパートで買い物を楽しんだ。

5　活動日程

● MTG スケジュール

12 月 6 日　第 1 回 MTG@びおとーぷ
12 月 13 日 第 2 回 MTG@あすみん
12 月 20 日 第 3 回 MTG@びおとーぷ
1 月 10 日　第 4 回 MTG@びおとーぷ
1 月 16 日　第 5 回 MTG@びおとーぷ
2 月 11 日　第 6 回 MTG@那珂川
2 月 11 日～2 月 12 日　国内合宿
2 月 16 日　第 7 回 MTG@びおとーぷ
2 月 21 日　先発隊出発
2 月 28 日　本隊出発
3 月 25 日　帰国
3 月 29 日　第 1 回帰国後 MTG@びおとーぷ
4 月 10 日　第 2 回帰国後 MTG (Skype)
4 月 21 日　報告会@びおとーぷ

●キャンプ活動スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
2/20	21	22	23	24	25	26
	先発隊出発	VISA 取得 村到着	市長表敬(1)	集落回り	集落回り	GAM(2)
27	28	29	3/1	2	3	4
ワーク①	ワーク② 本隊出発	ワーク③ 本隊到着 Welcome Party	ワーク④	ワーク⑤	Japanese Festival	
5	6	7	8	9	10	11
ワーク⑥	ワーク⑦	ワーク⑧	ワーク⑨	ワーク⑩ Home stay MTG(3)		Home stay 開始
12	13	14	15	16	17	18
ワーク⑪	ワーク⑫	ワーク⑬	ワーク⑭	ワーク⑮	マラサルテ 訪問(4)	Japanese Festival
19	20	21	22	23	24	25
ワーク⑯	ワーク⑰	ワーク⑱	River Party	ワーク⑲ Farewell Party	村出発	帰国

(1)市長表敬…Matag-ob の市役所を訪問し、市長さんに挨拶したり警察署にパスポートのコピーを渡したりする。
(2)GAM(General Assembly Meeting)…通称ジェネアセ。村人に私達の活動について知ってもらい、承諾を得る場。
(3)Home stay MTG…ホームステイ先に選ばれた家族への説明会。
(4)マラサルテ…前回キャンプ地。この日はキャンパー8 名が訪問した。

6　ワーク報告

●概要

場所：フィリピン共和国レイテ島マタグオブ市マサバⅡ村
期間：2012 年 2 月 27 日～3 月 21 日（土日を除く）、3 月 23 日（早朝のみ）
内容：BRGY road surfacing(村の公道整備)
参加者：村人、現地エンジニア、FIWC 九州

● ワーク内容詳細

１）ワーク地詳細

村	マサバⅡ村	人口	約 900 人
問題点	雨や地質の関係でマーケットやマタグオブの学校までつながっている一本道の凹凸が激しく、車やバイクで移動することが容易ではなく数回往復をすると乗り物が壊れる程に険しい道になっている。大体の人は週に 2～3 回、片道徒歩２時間かけて買い出しに行く。６年生までの学校が村にはあるが、それ以上の学年は毎日通学にこの道を使う。		
場所と移動手段	公共交通機関（バス）は通っておらず主にバイク。マタグオブ市の奥地。 市街地⇔マサバ村までバイク、軽トラックを使って片道１時間ほど。		
備考	国のプロジェクトで村入り口付近の公道（１００M）のコンクリート工事が行われ、去年１０月に終了した。 同市内の他の村と比べて、比較的貧しい村である。		

◎ワーク費

各ワーク算は以下の通りである。市は当初の予定（100,000）よりも大幅に増額した。FIWC の内訳は会計の項目を参照。

マサバⅡ村	P80, 000
FIWC	P130, 000
マタグオブ市	P150, 000

（単位：ペソ）

２）ワーク概要

今回はワークではでこぼこに壊れた道（約２km）の修復と補強を行った。

夏の下見の時点で１０月～１月は村人のみでワークを進めるという予定だったが、天候のために大幅に遅れてしまった。

そのため予算と範囲はそのままで内容を大幅に変更した。 変更後の内容の概要としては、

① 村の予算と FI の予算とで道全体をならし、排水溝を作るなど防水対策

② 市の予算で道全体の防水対策

更にワーク進行のために back hoe と呼ばれる重機を取り入れ作業を行った。

３）道の問題点

問題点①

1. 雨が降る
2. 地表が泥状に柔らかくなる
3. バイクや車のような重いものが通る
4. 道にデコボコができ通り辛くなる

問題点②

1. 雨が何度も降る
2. 分厚い泥が道の上に堆積する
3. 泥にはまり込み、足も車やバイクのタイヤも動けなくなる

主にこの２点であった。

それらの解決策として

・堆積した泥を捨てる

・道路をならし、でこぼこをなくす

・道路の水はけをよくする

この３点が挙げられた。

４）ワークの流れ

ワーク初日は本来予定外であったが、村の入り口付近の道がひどい状況だということで、まずはそこの修繕から行った。１週目は道路全体の均しを行った。基本的に back hoe が表面の泥を捨て、でこぼこを均し、地面の幅を拡げて、その後ろから人力で地面の形を形成しつつ固めていった。形成のために足りない砂は近くの山を掘り得た。

２週目からは溝づくりと小石撒きの２つの防水対策を同時並行する予定だったのだが、ここで資材屋・トラックのドライバーの都合や天候などが原因で資材遅れが起きてしまった。そのため待機中は溝作りを進めていき、小石が届き次第小石を散らして固めるという流れになった。溝作りは終了したが、キャンプ期間中に購入した小石が全て届けられることはなかった。

５）ワーク手順

① <u>泥を捨てつつ道路全体をならす</u>

back hoe※で泥を捨て、おおまかにならし平にしていく。細かい作業は手作業で行う。大きな穴には石を埋め、トンボ（leak）を使ってならす。その際、溝（canal）に水が流れるようにするため、地面の中心を少し盛り上げるように調節する。

② <u>タンパーを使って地面を押し固める</u>

③ <u>道路横に排水用の溝(canal)をつくる</u>

片側は斜面になっているため、キャナルは片側のみに作った。また、あらかじめ村人が作っていたキャナルに草や泥が入り込んでいたため、その除去作業も行った。

④ <u>道路部分に小石を敷き詰め、更に押し固める</u>

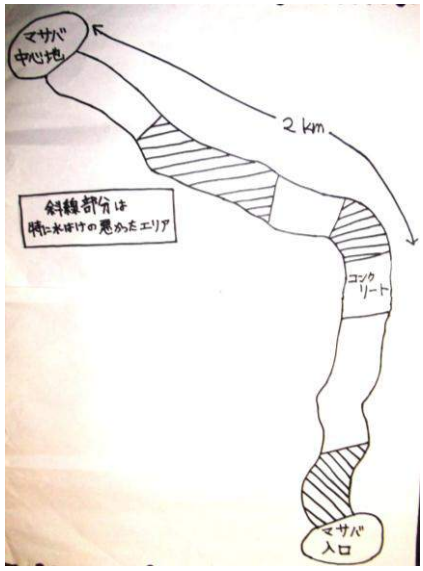
※ back hoe について

今回「back hoe」という前方にローダーバケット、後方にショベルが付いた重機を使用した。予定では市から２週間借りられるはずであった。しかし１週間目に西レイテで大規模な土砂崩れが発生、その復旧作業のために１週間で使用を終えることとなった。後に記すが、その後半日だけ借りることができた。

Back hoe は州政府の所有物であり、市がマンサハオン村の道の工事に使うため州政府から借りていた。村長自らタクロバン（レイテ島北西部）まで出向き交渉、そのおかげでこのプロジェクトのために優先的に使わせてもらう許可が降りたのである。市が借りている重機であること、市もこのプロジェクトに関わっていること、一時的な使用であるということから、FI は燃料費のみ支払った。

６）ワークの範囲

村の入り口から中心地までの地図。予定していたワークの範囲は入り口と中心地のほぼ真ん中にあるコンクリートのところからマサバ中心地までの約２kmであった。



※地図に書いてある斜線部分は、水はけが特に悪かったエリアで優先的にワークを行った。

◎小石について

小石を使わずに道を固めた場合、雨が降ると地面がツルツルになって車は空回りし歩こうにも滑る状況に陥る。小石は滑り止めになるのと同時に、雨で道が崩れていくのを防ぐ役割もする重要な資材である。小石の購入はバルトナド（オルモック近くの資材屋）に依頼し、料金の中に資材と配達料も含まれていた。

資材の運搬が大幅に遅れることが懸念されていたため、その対策として村の近くの川から小石を集め、それを FIWC が買い取るという策を取った。村人のワーク時間を午前と午後 30 分ずつ短縮し、その空き時間に川にある小石を集めてもらい、その量に応じてお金を支払うというものだった。１ガロン１２ペソという計算で、中には朝４時から小石を集め始め、５００ペソを越える人もいた。村人にとっては経済的にプラスの効果があり、我々にとっては小石代が割安で集まるということで一石二鳥だった。（※左の写真　石を計測している。白い容器が１ガロン）

◎市の予算で行うワーク

村と FI のワーク終了後に市の予算で、排水管(Colvert)を水はけの悪い要所 6 か所に埋めることになっている。back hoe が一度マサバを離れてから一度だけ半日帰ってきてくれたとき、この排水管を埋める穴を 6 か所掘ってくれた。そのためワークは用意されている穴に排水管を入れるだけの作業である。この予算が終了すればマサバにおける今回のプロジェクトは終了となる。

◎メンテナンス

今回のワークで最も重要なのはメンテナンスである。今回の舗装はコンクリートの様な上等なものではなく砂と石で作った道であるため、雨季に入り長く強い雨が降ることで壊れるところがでてくる。さらに土砂崩れが起きる可能性も高い。大事なのはそこで壊れた場所を随一修理・補強をすることである。

今回のプロジェクトを受けて村長が毎年の村の予算にメンテナンス費の枠を作ると約束してくれた。さらにこの道をいい状態で保ちたいという村人の道に対する想いもあるためメンテナンスについて問題はないだろうと思われる。

◎ワークの時間

午前：8 時～11 時
昼休憩：11 時半～１４時
午後：１４時～１６時
　　(現地人は１３時～)

炎天下のなかでワークを続けるため午前は昼前に終え、午後は少し日が落ちてから再開していた。ただ今回のワークでは中盤でキャンパーの疲労が目立ってきたため、午前組と午後組にキャンパーをわけ、片方の組は村に残って休むというシフト制をホームステイ開始三日前に取り入れた。その結果、普段狭いところで寝ていていたのが広々とぐっすり眠ることができ、少し無理をしてワークに出ていた者が遠慮なく休めたということで健康状態の改善が図れた。ホームステイ開始後はシフト制を廃止し、常に全員で作業にあたった。

◎モニュメント

ワーク終了予定日にモニュメントを制作した。制作時には雨が降っていたため FIWC メンバーとロクロクさん、みれいさんの名前のみが刻まれたが、その後村で村人の名前を足していくとのことで、村を離れる日にはいくつか村人の名前が見られた。このモニュメントを見る度にキャンパーのことを思い出し、その絆を忘れないでいてくれればと思い制作した。

◎総括

今回のワークは変更点が非常に多いうえに天候にされやすい難しいワークであった。元々は余裕のあるスケジュールでプランを組んだはずだったが、雨のため変更となり、最終的に時間が少し足りないまま終える形になってしまった。FI の帰国後、残された分は村人だけでワークを続ける。元々私たちが日本にいる間（１０～１月）も村人のみでワークをしてくれていたため、このワークがキャンプ中にすべて終わりきらなかったことはそこまで問題ではないと考えている。

ワーク前は、マタグオブのマーケットから村の入り口までバイクで移動するのに 100 ペソ取られていた。それ以降がワーク地であり、道が酷すぎて徒歩でいかなければいけなかった。しかしワーク後はそのワーク地を通って村の中心地まで届けてくれるようになった上に料金が 50~100 ペソとなった。

つまりワークの成果として、実際にバイクが運んでくれる距離が伸びた上に、その運賃が安くなった。そしてなにより村人からの感謝の言葉が絶えなかった。

◎最後に・・・

今回ワークをした道は 30 年間に行政から放置されていた。村は資金を積み立てるなど状況をどうにか変えようとしてきたが、規模が大きく手をつけられないままの状態が何十年も続いた。そこに今回 FIWC がワークをするということで、マタグオブ市の協力を得ることができ、FIWC・村・市でこの道を改善するという形になった。

ただでさえマサバはマタグオブ市の中でも貧しい村であり、村だけで改善をしようとするものならばこれから先何年かかるか想像もできない。下手をすれば、もし今回我々がワーク地としてこの村を選ばなかったとしたら更に何十年も酷い状態のままだったのかもしれない。道を一から舗装することは困難である。だがそれに比べて、一回舗装された道の修繕は容易である。さらに、我々がこの村でワークをしたことで村は大きな活力を得たのではないだろうか。今後はこの道の状態を村が自力で維持してくれることを切に願う。

7　係報告

(1) ＫＰ(Kitchen Police)

KP の仕事内容：生活の管理

1. 国内での仕事

・共同生活中における食器洗い、洗濯の当番を決定

→シフト作成（食器洗い３人、洗濯４人で作成）

・Farewell Party で紹介する日本食のレシピ等準備

→日本でしか入手できない食材は持っていく

＜シフト作成について＞

シフトはキャンパーの回数が平等になるように作成した（リーダー・ワークリーダーはMTG などが多いので回数を減らしていた。また平日はいれないようにしていた。）食器洗いは3 人も必要でなく途中から食器洗いの１人を洗濯の方に移した。

〈反省〉

×本隊を迎えに行く人や病人の発生によるシフト変更で、連続でシフトに入る人が出た。その際にKP がシフト変更を行ったため、不満が出た

→不満は聞き入れず、変更を希望するならそのキャンパーが別のキャンパーに代理人を立てるようにする

※保健係１人が必ずワークにいるようにするため、保健係を同時に洗濯のシフトに入れない

×シフト表は壁に貼っていたが、小さくてキャンパーが確認しづらかった

→大きくて見やすいシフト表を作る

2. フィリピンでの仕事

・ミネラルウォーター・生活用品・Farewell party 用食材 の購入・管理

・食事の前後にいただきます・ごちそうさまの号令、洗濯・食器洗い担当発表

・home stay の前に共同生活中に使用していた生活用品（洗剤、ハンガー等）の分配

・Farewell party の日本食づくりの説明

＜ミネラルウォーターについて＞

フィリピンでは日本と違い日本人が水道水を飲むとお腹を下す危険性が高いため、ミネラルウォーターを飲む。そのミネラルウォーターを常にきらさないように管理する。今回のキャンプでは

4本のタンクを購入し、タンクの水が残り2本をきったところで現地人に補充しにいってもらうようにしていた。

ワークでの水分補給のミネラルウォーターは個人ではなくKPが準備。午前と午後のワーク前にペットボトルに水を補充しておく。

〈反省〉

×現地人に買い出しのお願いをし忘れていることがあった

→KP２人で確認し合う

×ペットボトルへの水の補充が意外に時間がかかった

→KPは先に身支度をして、元から遅れて合流するその日の食器洗い係に頼む

＜Farewell Party について＞

今回のキャンプで作った日本食の量

→お好み焼き（お好み焼き粉600ｇ×２、24枚分 ）

ちらし寿司（ちらし寿司のもと×４、16人前）

・作る際には前もって、村長に村のキッチンを使う

・時間帯や必要なキッチン用品等を伝えておく。

・当日は４、５人ずつ30分交代のシフト制で日本食を作った

〈反省〉

〇もとを使ったため、簡単においしい日本食が作れた！

×調理時間を考えていなかったため時間配分が上手くできておらず、思ったよりも時間がかかった。そのため、最後のグループが長く仕事をしなければならなかった

→予想以上に長引いたときは、シフト二まわり目など具体的な指示を出しておく

×調理中には村人に味見をしてもらったが、肝心のパーティー中に日本食がどこにあるのかが確認できておらず、村人から感想を聞くことも忘れていた

→KPがしっかり確認すべき

(2)イベント

① Welcome party

日時2月29日（水）19:00~24:00　@BRGYホール

本隊がマサバ村に到着した当日に、村人が歓迎の意味を込めてWelcome partyを開いてくれた。私たちは1人ずつ自己紹介をしたあと、日本で購入してきた甚平を着てソーラン節を披露した。その後音楽に合わせて村人と遅くまで踊った。

＜反省＞

・用意していた音源が使えず、音なしでソーラン節を披露することになった。

・途中で酔いつぶれる人が数名いて、最後まで全員で楽しむことができなかった。

② Japanese Festival

日時3月3日（土）、3月18日（日）午後　@BRGYホール

3月3日

11:00~12:00 日本語教室

12:00~14:00 休憩&スナックタイム（あんこの餃子の皮包み揚げ）

14:00~16:00 大縄跳び

3月18日

14:00~15:30 習字

15:30~17:00 折り紙、こま、スライム

今年のJapanese Festivalでは、日本語教室、スポーツ（大縄跳び）、カルチャー（習字、折り紙、こま、スライム）を行った。カルチャーは4グループに分かれてそれぞれのグループごとに進行してもらった。雨で予定通りに進行せず、2日に分けて行うこととなった。しかし2日とも子供を中心に50人ほどの村人が集まってくれた。また、音響は村のものを借りた。

日本語教室（午前の部）

簡単な日常で使う単語（おはよう、ありがとう等）をビサヤ語、日本語、ローマ字で書いている紙を３セット用意して、それを見せながら村人に日本語を教えた。村人は配布した鉛筆を使ってノートを取りながら一生懸命に勉強してくれた。日本語教室を行った後は、村人がたびたび日本語を使ってくれるようになった。また村人に配った鉛筆と用紙は村人に持ち帰ってもらった。

＜反省＞

・教える言葉の順番を事前に決めておけばよかった。

・四カ所に別れて教える予定だったが、雨のせいで屋根のあるステージ周辺一カ所と変更になり、開始時間が遅くれた。

大縄跳び（午後の部）

日本人と村人の混合チームを６チームほど作りチーム同士で跳んだ回数を競った。チーム３回のチャンスを与え最高記録をそのチームの回数とした。普通の跳び方と８の字跳びの２パターンで競争をした。跳ぶ側も観客側も楽しんでくれたようで、非常に盛り上がった。

＜反省＞

・チーム作りに苦労して開始が遅れた。

・イベント係がリーダーシップを発揮して日本人をまとめることができなかった。

＜習字＞

使用した物

・　筆２０本

・　半紙３００枚

・　墨汁３.５本

・　新聞紙

◎反省◎

書いた後の半紙の後処理を考えていなかった。

雨のためステージに人が集まり、書く人が偏ってしまった。

＜スライム＞

・　洗濯のり７５０ml×２

・　ホウ砂５０g×２

・　絵の具２箱

・　割り箸

◎反省◎

同時に行った３つの中で一番盛り上がった。

後処理のことを考えていなかったこと、子供のイタズラなどで後片付けが大変だった。

＜折り紙＞

使用した物

・　折り紙２００枚

◎反省◎

紙飛行機を飛ばす予定だったが雨で内容が大幅に変更してしまった。

日本人の折り紙係で折り方を把握してない人がいた。

人手が足りなかった。（日本人１人につき村人２人ぐらいが適当）

＜こま＞

使用した物

・　爪楊枝１束

・　切った厚紙１００枚

・　セロテープ

・　色ペン

◎反省◎

日本人が率先しすぎてしまい、村人が実際に作業してもらうことを増やすべきだった。

＜Japanese Festival 全体の反省＞

・悪天候時のスケジュールは考えてなかったので、雨で最初の予定が大きく変更になってしまった。

・イベント係がもっと責任を持って進行しなければいけなかった。

・スナックは好評ですぐになくなったのでもう少し多く作っておけばよかった。

③　リバーパーティー

日時３月 22 日（木）　@マサバⅠ村の滝壺

ワークの打ち上げとして例年でパロンポンの海岸でビーチパーティーを行っていたが、マサバⅡ村から１時間ほど歩いたところに隣村マサバⅠの滝壺があり、ビーチパーティーよりも安くすむということで今年はリバーパーティーを行った。泳いだり、バーベキューをしたりお酒を飲んだりと大人から子供まで非常に盛り上がった。

④　Farewell party

日時３月 23 日（金）　@BRGY ホール

キャンプの最終日にお別れの意味を込めて村人が Farewell party を開いてくれた。私たちは一人ずつスピーチをした後、スピッツの「チェリー」を合唱した。マタグオブ市長の息子夫婦から表彰され、1 人ひとりに賞状が手渡された。その後豚の丸焼きなどのご馳走、また村人には日本食を振る舞った。みんなで夕食を食べた後は音楽にのって深夜まで村人と一緒に踊り騒いだ。

(3) 会計

[仕事内容]

金銭の徴収・管理・換金、毎日の収支記帳、見積りの算出など

具体的な流れ

日本

↓　　メンバーから生活費を徴収する。

↓

セブ

↓　　空港で生活費の一部を換金する。

↓　　セブは換金レートが悪いのでオルモックに行くまでに必要な費用のみ換金。

↓　　ホテル代、船代、ご飯代、ビザ代など(この段階ではメンバーが個人費のペソ

↓　　を所有していないのでビザ代は会計から立て替える)。

↓

レイテ島オルモック

↓　　残りの生活費、ワーク費、メンバーの個人費をまとめて換金し(できるだけ細

↓　　かくしてもらう)、個人費をメンバーに渡す。安全のため当面必要のない生活

↓　　費やワーク費の一部をノルウェルに預ける。

↓

村

↓　　生活費、ワーク費を会計が保管する。必要に応じて買い出しに行く人にお金

↓　　を預けたり、loklok さんへの感謝料を払ったりしてそれを記帳する。また、

↓　　フェアウェルパーティなどのイベントで FI からどのくらい払えるかを見積

↓　　もる（帰りの船代などを残しておく)。

↓

日本

[反省]

　ワーク費の方で細かいお金が作れず、生活費から細かい出費を立て替えたりした。

買い出しに行くメンバーにお金を預けると計算が狂うことがあった。

→買い出しに行くメンバーにもできるだけお金を崩すように協力してもらい、買い出しに行く人は必ず、会計からいくら預かったか、何にいくら使ったかを紙に控えて、計算上の残金と実際の残金が一致しているかを会計に報告する。

[料金の目安]

●宿泊費

シランガンホテル（セブ島）　※エアコン付き

シングルベッド 675ｐ/部屋、泊

ダブルベッド 875ｐ/部屋、泊

●交通費

・バン

（シランガン→船乗り場）　850ｐ/台

（シランガン→イミグレーション）　800ｐ/台

（シランガン→イミグレーション→船乗り場）　1300ｐ/台

・船

Supercat（セブ-オルモック）　740p/人（Terminal Fee含）

Weesum(セブ-オルモック)　545ｐ/人

・バス

（オルモック-マタグオブ）　50ｐ/人

・ハバルハバル

（マサバ-マタグオブ）　100ｐ/人

●レート

2012.2.21　セブ空港　10000円→5100ｐ

2012.2.22　セブ　　10000円→5000ｐ

2012.2.22　オルモック10000円→5210ｐ

●その他

セブ空港税　550ｐ

ビザ代　　3030ｐ

[おおよその旅費]

旅費	先発	後発
航空券	67,000	57,000
保険料	5,000	4,500
生活費	10,000	10,000
個人費	15,000	15,000
合計	97,000	86,500
		単位;円

［滞在中の収支］

収入		
徴収金	生活費	86,970
	引継ぎ	14,632
	ワーク費	130,000
合計		231,602

支出（ワーク費）		
ワーク費	資材	94,528
	ガソリン代	17,221
	その他※	3,950
感謝料	Loklok さん	10,000
合計		125,699

支出（生活費）		
宿泊費	シランガン	2,450
食費	水	3,762
	食費	16,020
携帯	ロード	3,350
交通費	船	26,375
	バン	4,000
	ハバル	2,860
	バス	1,270
	トライシクル	397
	タクシー	250
	その他	1,452
Tシャツ	服	1,900
	印刷代	4,000
生活費	雑費	3,383
パーティ	リバパ	4,277
	フェアウェル	7,269
	ウェルカム	1,000
合計		84,015

全体の収支

231,602−125,699−84,015=21,888p

※ワーク費その他

Back hoe の運転手への給料など

（単位ペソ）

⑷保健

【総括】

今回は高熱による体調不良者が多かった。(原因は疲労、水浴びによる体温調節などが考えられる。)しかし大きな怪我や病気もなくキャンプを終えることができた。今回、熱中症対策としてワーク中に水分補給と共に塩分補給を取り入れた。

【予防方法】

・水浴びは朝～昼にかけて気温が上がるタイミングで行う。

・洗いには除菌用ウェットティッシュを使うと良い。

・ワーク後、食前にうがいを行う。

・ペットボトルの回し飲みは避ける。できるだけ口を直接付けて飲まないこと。口の雑菌が入り繁殖するのを防ぐため。(今回、ミネラルウォーターはワーク用と個人用でペットボトルを分けて使用した。)

・ワーク中には靴を履く。サンダルやクロックスは危険。

【来年度のキャンプに向けて】

・消毒液、下痢・便秘薬、総合カゼ薬、鎮痛剤、冷えピタ、サバイバルシート（４～５個）※ティッシュ箱、ガーゼは用意して欲しい。

・常備薬はキャンパーに用意させる。

・粉末ポカリスエットをキャンパーに配布することを検討して欲しい。

※サバイバルシート…保温、断熱、防風、防水効果のある緊急用シート。(約３００円)

⑸ホームステイ係

【主な仕事内容】

- GAM でホームステイについて話す
- ホームステイする家を調査する
- キャンパーの希望をとり誰がどの家にホームステイするのかを決める
- ホームステイミーティングに出席し、ホストファミリーに NorWeLeDePAI が作成した規約書と FI からの要望についての説明を行う

【ペア決定までの流れ】

１．候補をあげてもらう

ステイ先の家は村長にお願いしてホームステイが始まる１週間程前にあげてもらった。前回のキャンプではステイ先の家は村の役員とそうでない人の家とが半々になるように村長にお願いしていたので、今回も同様にしてもらおうとしたが、トイレ等の関係でステイ先の家９軒がすべて村の役員の家となった。

※ステイ先の家の変更があったので９軒中２軒は役員の家ではなかった

２．ホームステイ先の家を調査

調査したのは、トイレ、家族構成、英語が話せるかどうかの３点。家庭の雰囲気を知るという目的もかねて、家を訪ねおしゃべりをしながら上記の３点を尋ねた。トイレは実際に借りてみた。

３．ペアを決める

各家の、トイレの有無、英語が話せるか、家族構成を表にしてキャンパーに発表し、第３希望の家までを紙に書いて提出してもらった。その際に、個人的な希望も書いてもらうようにした。その希望をもとにホームステイ係２人でペアを決めた。

はるか	まさえ はらちゃん	しほ しぇい	かんな なつき	あやな なお
だいき すすむ	かーりー よしけん	りょーへー ありさ	まつじゅん はやと	

【スケジュール】

期間:3/11～3/23　12 日間

日	月	火	水	木	金	土
2/26 GAM	27	28	29	3/1	2	3
4 候補決定	5 ホームステイ調査	6 キャンパーに候補の家発表	7 希望集めてステイ先決定	8 キャンパーにステイ先発表	9 ホームステイミーティング	10
11 ホームステイ START	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23 ホームステイ終了	24

【ホームステイ中の 1 日のスケジュール】※一例

~7:50	起床、水浴び、各家庭で朝食、洗濯
8:00	ワーク開始
11:00	昼食、昼休み
13:00	ワーク再開
16:00	ワーク終了
17:00	ミーティング
~22:30	フリータイム、各家庭で夕食、

【反省】

良かった点

- キャンパー全員の希望を聞くことができた
- 新旧、男女のペアをうまくつくれた
- ホームステイ中は 2 日に一回、全員分の食材等をまとめて買い、それを 9 軒に分け、各ステイ先に渡す仕組みにしていが、その際たくさんの種類の食材をこまごまわけるのではなく食材の種類を減らして一つ一つの量を多くしたのはよかった

悪かった点

- キャンパーが奇数のため１人余ってしまうが、その１人を女性キャンパーにし、さらにステイ先を他のキャンパーたちのステイ先から離れたところにしてしまったため、夜道を一人で帰らなければならなかった
  →現地の子供が夜は一緒に行動してくれたので危険はなかったが次回は避けるべきだ
- トイレや電気の関係でホームステイ開始直前にステイ先の家が変わったところがあった
  →村長にお願いする際にトイレや電気のことをしっかり確認しておくべきだった
- 居場所がわからなくてステイ先の家族が心配していた
  →外出する際はどこに行くのか伝えてから出かける
  ２人でステイしている場合は互いが互いの場所を把握しておく
- 門限は22時30分だったがそれよりもはやく就寝する家庭もあり、キャンパーが帰ったときにドアに鍵がかかっておりわざわざ起きて開けてもらわなければならなかった
  →村側とも話し合いをしたが気にしなくていいということだったので各自ステイ先のやり方に従うようにした

【総括】

約２週間ホームステイをし、現地の暮らしを体験することで、キャンパー全員が現地の文化や生活をより深く知ることができた。どの家庭でも、キャンパーを家族の一員のように扱ってくれたことを嬉しく思い、感謝している。

８　生活状況

衣　フィリピンはキャンプ期間中乾季に当たり、最高気温が30℃を超えるような日がほとんどのため通常Ｔシャツに半ズボン、クロックスといったラフな格好で生活していた。ただし朝晩は冷え込むため長袖シャツや羽織るものが必要。またワーク中の虫よけ、日焼け防止のためにスポーツ用アンダーウェアを着たり半ズボンの下にレギンス、タイツを履いたりしているキャンパーも多かった。これらは洗濯しやすく乾きやすいため便利。また熱中症防止のため帽子は必須。クロックス、T シャツ、短パンなどほとんどの衣類は現地で購入できるため、途中で服を買い足したメンバーもいた。

食　フィリピン料理は鶏肉、野菜、魚を使ったものが中心で、醤油や塩で味付けしたものが多く比較的日本人の舌にあうもの。主食は米（タイ米）でおかずが 1~3 品という献立が普通。今回の村は交通の不便な場所にあったため、インスタントラーメンのようなものや缶詰など保存食を食べる機会も多かった。その他バナナやココナッツ、マンゴーなど亜熱帯のフルーツもたくさん食べることができた。お祝い事にはレッチョンバボイ（豚の丸焼き）がつきもの！基本的に食事のときはコーヒー又は水。その他コーラやスプライトなどのソフトドリンクを飲むことも。お腹を壊す可能性があるので、生水は避け必ずミネラルウォーターを飲むようにしていた。

住　マサバ村での共同生活（2/21~3/10）中はバランガイホール（村の公民館）の床にゴザを敷いて全員で寝るようにしていた。病人、ロクロクさんは隣のヘルスセンター（診療所）に折りたたみベッドを置いて寝た。またトイレもヘルスセンターのものを使い、風呂は近くの家で借りるなどしていた。ホームステイ中は家によって個室を与えられたりリビングで寝たりと様々。

【風呂】

フィリピンではポリバケツやタンクに溜めた水を手桶ですくって水浴びする「リーゴ」というスタイルが主である。トイレとリーゴの場所が一緒になっている家が多く、また共用の洗濯場など外でリーゴをする場合もある。その場合は服を着たまま水を浴びる。今回男性メンバーは外でリーゴをしている人がほとんどだった。石鹸、シャンプーは現地で安く購入可能。※ワークなど激しく体を動かした後は身体が熱を持っているため、1時間ほどおいてからリーゴをする。（熱を持った状態で水をかぶるのはよくないらしい。）また、日が落ちた後は冷えて風邪をひきやすいためリーゴはしない。

【洗濯】

洗濯機はなく、タライに水をため、粉末洗剤や固形石鹸を使い手洗いで汚れを落とした。日本人は手洗いに慣れていないため時間がかかる+汚れがなかなか落ちない…。泥汚れを落とすときはブラシが便利。干すときは共同生活中にはバランガイホールの周りに張ってもらったひもに、ホームステイ中は家の物干し場や近くの柵などに干していた。タライ、ハンガーなどは共同生活中使うものについては購入した。

【トイレ】

便座が無く、低くて小さい洋式便器のような形のものが主流。用を足した後はポリバケツなどにたまった水を手桶ですくって流す。ティッシュは流せないので、ゴミ袋を持って行きゴミとして捨てていた。うまく流れないこともしばしばあるので特に大をするときは注意！

【買い物】

マサバ村からは「ハバルハバル」と呼ばれる中型バイクで 30 分くらいのところにマタグオブ市の市場があり、そこで食料、衣料品、文房具、洗濯用品など生活に必要なものはほとんど調達することができた。食料品の買い出しは基本 2 日に 1 回、2 人 1 組で行くようにしていた。ホームステイ中は買い出しに行った 2 人が食材を 9 軒分に分け各家庭に配った。また、村の中には「サリサリ」（※上の写真）と呼ばれる小さな個人商店があり、お菓子、酒、洗剤などちょっとした買い物をすることもできる。村から 1 時間半ほどのオルモックという港町では、マタグオブではできない買い物や写真の現像、円からペソへの換金などもできた。

【交通】

マサバ村にはバスが通っておらず、また村に 1 台ある「モルティカブ」という軽トラックも道が悪くほとんど使えないため、買い物の際には村の「ハバルハバル」と呼ばれる中型バイクに 2 人～3 人乗せてもらい市場に行っていた。また村からオルモックへ買い物などに行くときは、まずマサバ村からハバルハバルでマタグオブのバスターミナルか、市場近くのサントロサリオ村にあるバス乗り場に連れて行ってもらい、そこからバスで移動した。

オルモックやマタグオブの中心部には「トライシクル」と呼ばれるサイドカー付きバイクも走っており、それに乗って移動することもあった。その他空港⇔セブシティ間はバン、セブ島⇔レイテ島間はフェリーで移動した。バンやタクシーに乗る際は高額な運賃をふっかけてくるドライバーもいるため、しっかりと値段交渉をしてから乗る必要がある。また、降りるときは車内に忘れ物が無いかどうか確認し、できれば連絡が取れるようナンバーを控えておく。

9　Tシャツ

＊T シャツができるまで＊

①シャツのデザインを国内での MTG 時にメンバーみんなで案を出し合って決める。

②オルモック到着初日、無地の T シャツを買い、印刷屋へ行ってデザイン画と一緒に渡して依頼をする。

※このとき、何日の何時に完成品を受け取りに来るかを、念入りに伝えておくこと。

③完成した T シャツを取りに行く。この時に代金を支払う。

今回、T シャツ代は 1 枚 95P、印刷代は 1 枚 200P だった。

・デザインが細かすぎたため、印刷ミスが目立った。また、洗濯時に色落ちしやすかった。

・受け取りの日時を指定していたけれども、期限を過ぎての受け渡しだった。

表：かんなデザイン　　裏：まさえデザイン

ロクロクさん、実玲さんもおそろいの T シャツだよ＼(^o^)／

１０　他己紹介

まさえ（リーダー）

リーダーとしてみんなを引っ張ってくれたまさえ姉さん。村人と交渉をしててきぱきと物事を進めていく姿は尊敬します！！姉御肌でまさにできる女って感じ。でもそれだけでなく毎日のように酒を飲んで酔っぱらっていたり、リチャードと暗闇に消えていったり…。といろんな面を見せてくれます。そんなまさえ姉さんのおかげで無事にキャンプを終えることができました。ほんとにありがとう。

From　よしけん

はるか（副リーダー）

はるかはしっかりしていて何を任せても安心できるということから、一人でオルモック（バイク、バスを乗り継ぎ約一時間の都市）に行くこともしばしば…。はるかは英語で話す時、何故か口調が強腰に…お陰でなめられずに済みました（笑）ホームステイも一人で頑張ってくれましたね＾＾しっかり者のはるかが時折見せる嬉しそうな表情、フィリピンラブの賜物でした♪

From ありさ（チェルシー）

りょーへー（ワークリーダー）

我らがワークリーダー rrrrryohey!!いつもおちゃらけてみんなを笑わせてくれました。ワーク中は誰よりも一生懸命でみんなをしっかり引っ張ってくれました^^サックを担いで歩く姿はまるでフィリピーノ!何度現地人と見間違えたことか…(笑)ギターが弾けて、運動できて、料理ができて、気も利いて…なのになんでか女の子には人気がなかったようで…f^^;りょうへい、早く報われる日がくるといいね☆ワークリーダーほんとにおつかれさま☺

From　はらちゃん

かーりー（記録係）

ミーティングではいつもみんなが気がつかないような所を補足したり意見言ったりして積極的でした。ディスコでは日本では見られないようなはじけたかーりーお兄やんを見ることができます。ディスコで一気に印象ががらっと変わったよ!! ただ毎晩かーりの寝顔は怖かった…笑　　From　あやな

すすむ（KP 係）

下見からの参加だったね。ワークでは誰よりも率先して村人と絡む姿が印象的！彼のまわりはいつも笑い声であふれていました。そう、笑いといえば、彼はお酒を飲むと笑い上戸に様変わり。ちょっとでも酔えばイヒヒ～と笑い出し、もう誰にも止められません。どうやったらそんなふうに酔えるのか、不思議です。また一緒にマサバに行けてよかった♪1 カ月間ありがとう！！　　From　かーりー

かんな（会計係）

かんなはグアパだそうです。ワーク中にダンスをしていてマロマロ♂はメロメロ。女の子にもモテすぎて大変なことに！（笑）ソーラン節でもセンターを踊っていて裏のダンスリーダーやったな♪下見のときの妹キャラから姉貴キャラに成長しました。会計係を担当し、2度も買い物でミスしたまつじゅんを罵倒していた姿にみんなが抱腹絶倒でしたw。下見んときからありがとう!！来年のキャンプもがんばってな！！　　From　すすむ

だいき（会計係）

大きな愛の樹と書いてダイキ。大学三年生。本来ならば、「まつじゅん、はやと、だいき」の３人でチームおっさんを結成するはずだったのですが、彼は最後までおっさん扱いされることありませんでした。彼は女子キャンパーから”だいきゅん”と呼ばれて親しまれ、いろいろな場面でみんなに頼られる素晴らしいキャンパーでありました。一緒に生活できて楽しかったです。本当にありがとう。

From　はやと

はやと（イベント係）

杉田氏との出会いは秋風漂う１０月の下見報告会。見た目は壮年の中年男性そのもので、てっきりキャンパーになるとは思ってはいませんでした。それから２月に家に行き、生春巻きをご馳走になったタイミングでキャンパーであることを知ったときは、驚きました。それから彼の悩みを相談されるまで仲良くなりました。具体的な相談内容は（大人の都合で省略）でしたが、是非頑張ってほしいです！さてさて、そんな彼ですがワークは積極的で、村人とも楽しげにやっていたので安心安全でした。隼人がもつキャンプにかける静かな闘志は本物です(・∀・)

From　まつじゅん

まつじゅん（保健係）

関東の異端児、まつもとじゅん。某有名人と同姓同名、まつもとじゅん。だけどちょっと残念、まつもとじゅん。日を追うごとにどんどんＭっぷりが増してったね(´Д`) はらちゃんに蹴られたいとせがむ姿は、まさに変態の名がふさわしかった…。そんな彼もみんなの健康を気遣ったり、キャンプに対する熱い気持ちがあったりと、ちゃんとまともな一面もあるんです。彼は色々と要注意人物です。

From　しほ

しぇい（カメラ係）

男子の中の愛され（イジられ）キャラ☆見た目はさわやか、実はオトメン。「君に届け」集めてます❤（風早くんになりたいらしい･･･）ワークのときはガッツリ働いて、僚平の代役だってできちゃいます！そんなしぇいはバッカン（村の子供）が大好きです。いや、バッカンの顔が好きなんです。笑　そんなしぇいがみんな大好きです☆

From　かんな

あやな（ホームステイ係）

あやなは見ての通りすごく可愛い子(*^^*)羨ましいことに村一番のイケメンの心を射止めていました。おっとりした性格と思いきや、サバサバしていて毒舌なんです(^^)タイツの上から OFF!を塗る荒業は自分には真似できません(笑)まつじゅんみたいなＭ男はあやなとお話することをお勧めします(^O^)

From　なつき

しほ（T シャツ係）

ポケーッとしてると思いきやたまに出る毒舌が私のツボ。実はしっかり者のちょうしほ。イジられつつ、でも頼りにされてるオイシいキャラだと思う。第一人称は長。怒ると第一人称が「あたし」に変わるらしい（かんな談）。そんな長さん、目を開けながら寝る技を持っている・・・・？！？！とりあえず、いろんな意味でこの子は面白いです＼(^o^)／　　From　まさえ

はらちゃん（ホームステイ係）

彼女の名ははらちゃん。優しそうな顔をしておきながら彼女はテコンドーの使い手でウェルカムパーティーではあるキャンパーの尻を蹴り彼に重傷を負わせたほどの蹴りの持ち主である。だがそのような恐ろしい面を持ちつつも新キャンパーにしていち早く村人の輪に溶け込み子供からも大人からも愛されていた。そんなはらちゃんはアメをいつも食べているようなほっぺがチャームポイントらしい。時には村人とはしゃぎ、時にはキャンパーからいじられる、そんなみんなに好かれているはらちゃんなのでした。　　From　しぇい

なつき（保健係）

通称「保健のお姉さん」、またはワーク中に水を配る「水女」（みずじょ）。でも本当の姿は筋肉好きの変態です。妄想力がこわいです。夏季が推すイケメンを見て女子はその趣味にも衝撃を受けました(笑)。出発前はホームシックにならないかと心配もしたけど、キャンプ中に様々な荒業を身に付け、帰国前にはほぼフィリピーナ！夏季、いっぱい笑わせてくれてありがとう＼(^O^)／

From　なお

なお（KP 係）

なおは多分元気で明るい女の子で、みんなににゃおにゃお(猫の鳴き声)呼ばれて喜んでました。ある日のワーク中に急に村人と走って競争しだした元気っぷりにはドン引きした記憶があります。なおの音楽センスはずば抜けてて、歌ってるときにあの人音外してるって言われるのがこわかった！(笑)そして酔っぱらった時のなおはこの世のものとは思えないくらい…ってのは大げさだけど、うん、可愛かったです。笑　　From　だいき

ありさ（カメラ係）

ありさは英語&ビサヤ語がうまい!言葉のこともフィリピンのことも、分からないことがあればすぐ聞いて、知識に貪欲なところがほんとえらいなーと思ってました^^そして美白への執念（笑）は人一倍すごかった。ワーク中も休みの日も焼けないように完全防備してるありさに女子力じゃかないません…Fiでの今後に期待してるよ＼(^o^)／　　From　はるか

よしけん（イベント係）

よしけんは変態です。「ようじょとしたしくしたいけん」略してよしけんです。普段そんな馬鹿騒ぎするやつじゃないです。下ネタで急にテンションあがったりします。突然爆弾発言をぶっこんだりします。現地人と首と乳首を洗濯バサミで繋げてにやにやしてました。でも彼はたとえ変態でも、仲間を助けるためには自己犠牲もいとわない男だということも私は知っています。実は良い変態だったんです。ありがとう変態紳士！　　From　りょーへー

11　感想

♀まさえ

まず最初に、一ヶ月間無事にキャンプを終えられたことに感謝したい。３回目のワークキャンプ、そしてリーダーとしてのワークキャンプ。初めて一から関わってきたこのキャンプには特別な思いがある。日本人キャンパーには心から楽しんでほしかったし、村人にも日本人との生活を楽しんでほしかった。自分以外のキャンパーが楽しんでいるのを見ることが自分にとってこんなに嬉しいことだとは思いもしなかった。毎晩各家から歌い声、ふざけ合う声が聞こえ、お酒を飲み、語り、みんなキラキラしていた。それを見るのは本当に嬉しかった。

タタイパリンはお酒を飲んでるときに私を見かけると、いつも名前を呼んでくれた。カンパイ、と言ってお酒を勧めてくる。(そのせいでウェルカムパーティー前にブラウンイーグルを６～７本あけて酔っ払い、到着したばかりの本隊にドン引きされた…笑) フェアウェルパーティーでもそうだった。彼は私に「FIWC がマサバに来てくれて本当に感謝している。本当にありがとう。」と言ってくれた。酔っぱらってたけど、あれはホンモノだった。その時の自分の気持ちをどう表せばいいかわからない。とにかくこの村でワークをして、そしてリーダーとして関われたことが本当に幸せだったと思った。

キャンプ中、村人のこのワークに対する思いは痛切に感じた。そして私たちに対しても、“日本人”としてではなく家族、一友人として受け入れてくれた。去年の夏と比べて、私たちとマサバの村人の輪が着実に広がっていった。それはバヤニハンの数やフェアウェルの人数を見れば一目瞭然。これはリーダーや下見キャンパーのおかげとかそんなんじゃなく、みんな１人１人の力のだと思う。

キャンプリーダーになって約１年、本当に色々なことがあった。でも改めてキャンプ生活を振り返ると感謝の気持ちでいっぱいだ。日本人キャンパーはもちろん、ロクロクさん、みれいさん、そしてなによりマサバの村人、このキャンプに関わってくれたすべての人たちに。本当にありがとうございました。

♀はるか

自分たちがゼロから作ってきたキャンプを終えて、この村を、このワークを選んで本当によかったと思える。キャンパーみんなが、マサバの村人みんなが「行ってよかった」「来てくれてよかった」と思えるキャンプにしたい。マサバがキャンパーの「帰る場所」になってほしい、これが下見の頃からの副リーダーとしての目標だった。下見の後変更が相次ぐワークに、出発前は本当にこのワークを選んでよかったんだろうか、マサバの人たちに迷惑をかけるだけになるんじゃないかと考えたこともあった。でも実際に村でみんなと毎日を過ごし、ワークが進むうちにそんな不安は消えていった。帰国

の日、泣きながら別れを惜しむみんなを見て、キャンパーの「また帰りたい」、「次のキャンプも行きたい」の声、村人のFIへの感謝の言葉を聞いて、私の目標は達成できたんだなと感じて本当にうれしかった。そして、今回のワークで市から多くの協力を得たと同時に、村に道のメンテナンス費用の枠ができたことで、何の知識もない学生の私たちにもひとつの村を動かすことができるんだと実感し、今までのキャンプでのマタグオブとFIのつながりがなければこのワークは成功しなかったと思うと改めてFIの活動の、ワークキャンプの影響の大きさを思い知らされた。こんな活動に関わることができて本当に幸せだったな、と思う。

人見知りだし頼りない副リーダーだったと思うけど、まさえ、りょーへーはじめキャンパーのみんな、マサバのみんな、ロクロクさん、実玲さん、日本で私たちを支えてくれたみんな。みんなのおかげでほんとにいいキャンプができた！言葉にできないくらい感謝してます。本当に本当にありがとう。

そして私の中で、大きな転機になったワークキャンプに、第２のふるさとになったフィリピンという国に、Daghan Salamat!

またマサバに、フィリピンに帰りたい!

♂りょーへい

下見キャンプで決めたワーク内容は著しく変化し、いざワークが始まってみても変更点ばかりで予定通り進むなんてことはほとんどなかった。今回のワークは今までで一番変更が多かったそうな。何度も何度も心が折れそうになったガラスのハートのワークリーダーだった（笑）そんな時に支えになったのは、キャンパーと村人。何気ない会話、楽しそうな様子、ふとしたことも励みになり、ワークリーダーをやり遂げることができた。

Farewellの日の早朝、まだ日もでてなくて真っ暗な頃に村人に黙って日本人だけでワークをする予定だった。けれども、日本人が作業する場所がなくなる程の村人が手伝いに来てくれた。きっと彼らは、自分達だけだったならばこんな時間に起きてまでワークはしない。それでも来てくれたのは、それだけ日本人のことを好きになってくれたからだと思う。

下見の時のfarewell、そして今回のキャンプでのwelcome、どちらも同じようにディスコがあった。その時多くの村人は、日本人がその場所からいなくなってから踊り始めた。けれども、今回のfarewellの夜は村人と日本人が最初から最後まで一緒に踊り続けていた。ものすごく嬉しかった。１ヶ月のキャンプで、間にあった壁は全てなくなったんだなって、本当の絆がうまれたんだなって思えた。

心が弱っている時は誰かに支えてもらい、楽しむ時はみんなで楽しめば何倍にも楽しくなる。１人では泣きたくなるようなことも誰かとなら笑い話に変わる。人は孤独では生きていけない。助け合い、高め合いながら成長していく。‘絆’の力は偉大だ。フィリピンの生活に触れ、人の心の温かい部分を感じ、その温かさが伝染してみんなが幸せを感じられた。人と人との繋がりの強さ、そしてその尊さに改めて気づかせてくれたキャンプだった。

キャンパー、そして村人との間に確かな強い絆ができたこと。これは自分の中で一生涯誇れ、芯になる財産だと思う。最後に、多くの人に感謝感謝！ありがとうございました！

♂かーりー

自分はもはや惰性でキャンプに来ているだけなのではないか――キャンプ序盤はなぜか憂鬱で、気持ちがついていかなかった。しかし結局今になって振り返ると、充実した楽しい毎日を過ごすことができたなと、心から思える１カ月間だった。難しいことは考えず、素直に楽しむ心を持つことができたからだと思う。

国際協力の仕事に興味があった。自分の足で知らない国に行き、そこで生活してみたかった。そんな自分の好奇心がきっかけで関わりはじめたフィリピンキャンプ。一つの区切りがついた今、自分にとっての一連のキャンプを総括して言うならば、それは「人と人との繋がりの尊さを再認識する旅」だったように思う。旅というと安直で語弊があるかもしれないが…。現地の村人、エンジニア、行政機関、そして日本人キャンパー。すべての人々の力が合わさって、FI のフィリピンキャンプは作られ、受け継がれてきた。その年のキャンパーが現地で築きあげる人と人との繋がりは確かに、これから先の新たなキャンプを作るための礎となっている。何も毎年ワークを行うこと自体が最終目的なのではない。あの人にお世話になった、あいつとたくさん笑って語り合った、また会いたいな、元気にしているかな…遠く離れた相手をそのように思い合う気持ちが、キャンパーと現地の人々双方の心の中で生き続け、これからを生きる糧となる。それは次のキャンプでも繰り返され、また新たな繋がりが生まれていく…。そのような‘国を越えた繋がりの連鎖’こそ、自分が考えるフィリピンキャンプの魅力である。

ワークキャンプを行う意味、可能性とは何なのか――この１年間考え続けてきたが、少なくとも今の自分が書けるのはここまで。最後に、今回のキャンプに関わって下さったすべての方々に心からの感謝の意を表し、この文を終えたいと思う。

♂すすむ

下見キャンプに引き続き２度目のフィリピンキャンプ。下見ではフィリピンキャンプについてほとんど何も知らず何も出来ず自分の価値が見いだせなかった。しかし今回の本キャンプでは初海外渡航の人もいるし、何よりも現地のことを知っているのは自分だからしっかりしなくちゃと責任からのプレッシャーがあった。でも自分には何ができるのか？とずっと考えていた。

下見キャンプが終わっていろいろと振り返ってみたら下見で滞在した前回キャンプ地では昨年度のお礼ということで見返りを求めず、純粋に、去年いなかった自分ですら仲間のようにご馳走してくれたり泊まらせてくれた。来年の下見キャンパーが同じような経験ができるような関係になるキャンプにしたいと思っていた。だから本キャンプでは自分も積極的に村人と話にいって馬鹿やって本隊が来るまでにマサバ人が全く知らない日本人でも温かく迎え入れてくれるようにしよう、ほかのキャンパーたちにも交流させてワークを盛り上げよう！と思った。来年再び日本人が事後評価にくるときに日本人のため、フィリピン人のために道の状態を保たせておいてもらいたい！と願っていた。そのため日本人を信頼してもらうため、彼らを働かせるためにワークを誰よりもがんばる、積極的に交流することに決めた。自分たちがマサバ村についてからはみんなはじめは彼らに躊躇していたがお互いにちょっとずつ歩み寄っていって親しくなっていった。日本人がワークを盛り上げてくれたから現地人も懸命に働いてくれつらいはずのワークも楽しかった！！密かに今回の自分の役割としていたマサバ村の人と日本人との間に心の「道路」を作るのに成功したと感じ嬉しかった。

最後に、フィリピンキャンプについてみんながみんな、係り以外にも役割を果たしていて、笑かしてくれる奴、イベントを催してくれるやつ、頼れるやつ、相談役…今の時代では使えない人間は切り捨てられるがフィリピン人含め無駄な人間なんていなかった。みんなフィリピンにいるときに何かしらの理由で日本に帰りたいと思ったこともあると思う。でもみんなが支え合っていたから無事誰もリタイアすることなく終えることができた。チームが一丸となってワークキャンプを行うことができた。だからフィリピン人、日本人どちらとも毎晩飲み、語り合って送別パーティではともに寂し泣きをしていて強固な「絆」ができて本当に本当に良かった。みんなありがとう。フィリピンキャンプ万歳！！

♀かんな

３月 24 日、私は帰りの船の中で下見の感想文を読み直した。「村人と同じ目線に立って、同じ気持ちで問題を解決したい。」私が下見で１番強く感じたこと。すごく単純だけど、自分の中にある自分と村人との差を無くしたかった。今回のキャンプで １か月以上の村人との生活、それからワークを通して、それを達成することができたと思う。下見のときには顔も名前も知らなかった人と、話して、笑って、泣いて・・・生まれた国、育った環境、宗教、言葉、考え方、ありとあらゆるものが違うの

に、意思が通じ合って、互いに信じ合うことができた。ワークに来るバヤニハンは、日が経つにつれて増えていったし、年齢も性別も関係なく、ちびっこからおじいちゃんまで一緒に働いた。村の若い人達は平日学校に行っていてワークに参加できなかったけど、休日私たちが休んでいるときに雨の中働いてくれた。そういう村人たちの変化や、行動の一つ一つが嬉しくて、もっと仲良くなりたい！と思ったし、あたしも頑張らないと！って思えた。本当に毎日の生活が楽しかった。たまにちびっこにイラってする日もあったし、イタズラしてくる青年に本気で怒ったこともあった。逆にお腹がよじれるくらい笑う日もあれば、村人と一緒に悪巧みして日本人をからかうときもあった。フェアウェルの日、仲良くなった18歳の女の子から言われたことが1番記憶に残っている。「私たちの村を助けてくれてありがとう。あなたがステージで泣きながら挨拶しているとき、私も泣いてしまった。また絶対戻ってきてほしい。この村を選んでくれてありがとう。」下見のときも感じたことだけど、「また戻ってきて」と言われることがすごく嬉しくて、こんな風に思ってもらえるくらい強い絆を築けたんだと実感した。それに、助けてあげたなんて思ってない。みんなで一緒にがんばったし、これからだってこのキャンプが村人と私たちの両方の心の支えになると思うから、きっとまたお互い頑張れる。たくさんの人に支えられて、助けられて、協力してもらって、こんなに良いワークキャンプになった。この感謝の気持ちを忘れずに、自分自身も変わっていけたらと思う。

♂だいき

３回目のフィリピン。今回は本キャンだけの参加だった。Masaba での生活も終盤に差し掛かったある日、去年のワーク地 Malazarte を再訪した。再会の喜びを分かち合い、去年のワークの成果を確認しようとタンクを見に行った…。「あれ、水ねぇじゃん…」。ワークで作った Water System は水源のタンクが崩れ、村には水がほとんど通ってなかった。持続性や確実性…いろいろ考え抜いて決め、成功したと思っていた(去年のワーク後は水が流れていた)ワークがこういう結果になったのはすごく悲しくて悔しかった。それでも村を再訪した FI を村人が快く迎え入れてくれたのは、きっと FI の与えた影響が Water System だけでなかったから。ワークがあってこその FI のワークキャンプだが、それだけはただただ嬉しかった。ワークキャンプはキャンパーと村人がいて初めて可能になるもの。大雑把にいえば日本人が金ときっかけを、現地人が住と労働力を提供する。それをもとに１ヵ月お互いに支えあいながら暮らしていく中で、村人は日本人を大好きになりキャンパーがいつか帰ってきてくれるこ

とを願ってくれ、そしてキャンパーにとってはステイした村が第２の故郷になる。それがFIの交流の姿だと思う。今回も多くのキャンパーにとってMasabaが第２の故郷になったはずだ。国境や身分の壁を越えて、同じ時間や空間や感情を共有する場がそこにはあった。

キャンプを見ていて思った。こうやって繋がっていくんだなと。去年の新キャンパーの成長ぶり。下見キャンパーたちの支えのもと心からキャンプを楽しんでいる今年の新キャンパー。村長が酒を飲むたびに何度も繰り返し言った「ありがとう」や村人の「次はいつ帰って来るの？」。FIらしい『意味のあるキャンプ』ができる限り、フィリキャンが続いていってほしいと思う。

毎年変わらないのはFIのフィリキャンは日本人と村人たちが互いに助け合って一緒に作っていくものだと言うこと。そういう意味でフィリキャンはなんだかボランティアと言うよりは「日本人とフィリピン人を繋ぐイベント」のような感覚で、そのイベントを通して本当にいろんなことを考えさせられる。それがボランティアにはさして興味のない自分がフィリキャンを好きな理由。

今までこのキャンプを繋げてきてくれた全ての人に感謝、そしてこれから繋がって行くキャンプに期待！

♂はやと

「学生生活で１番心に残ったことは？」
この質問に答えられるようなことをしてこなかった自分。学生のうちしかできないことをしよう。自分に何かしらの変化をもたらそう。そういう気持ちで大学三年というラストチャンスでワークキャンプに参加しました。

キャンプ中は某おっさんとバカなことばかりやったり、フィリピンの山奥で一週間血便に悩まされたり、みんなにはたくさん迷惑をかけたけれど、今振り返るとマサバでの一ヶ月間を精一杯やり切った満足感でいっぱいです。

″ワークキャンプに参加して本当によかった″

FIWCで関わった全ての人に言いたい。ありがとう！そして、ありがとう！

♂まつじゅん

感想を一言でまとめるなら、”期待値が一番高く、満足度がいっぱいのキャンプ”でありました。

昨年から２回目のフィリピンキャンプ参加だったが、今回は後編のような気がしていました。２０１１・１２年、２つ合わせて僕の中では１つのキャンプでした。もちろん、最初からこう考えていた訳ではないが昨春が終わってから、”あの空気

をもう一度味わいたい”という欲求が凄まじかったのは言うまでもありあません。それだけフィリピンは魅力ある国であり、ワークキャンプには最高の舞台だと思います。また、特に期待値では新メンバーと協調するため、出発２週間前から博多入りし、まだ慣れないキャンパー同士と打ち解けたり…もはや営業活動のようでしたが、これも去年の反省を生かすためです（出発当日に博多入りしたため笑）　キャンプの中身に触れるのは、原稿用紙４００枚のスペースを頂けたら総括出来ますが、大人の都合により他のキャンパーに任せます。ただこれだけはハッキリ言えますが、内外で”とても評価の高いワークをしたキャンプ”と言われました。

キャンパーとしてはこれほど名誉のあることは無いのではないでしょうか。これで悔いのないFIキャンパーとして、８年の終止符を打てました。ありがとうございます。

♂しぇい

この１か月はとても楽しくて充実していて濃い１か月だった。実際何をしたのかと聞かれてもワークやって毎日村人とはしゃいだりお酒のんだりしてたとしか言えないが、そんな毎日が異様に楽しかった。一番心配な言語の面でもつたない英語とほんの少しのビサヤ語とジェスチャーでなんとかなった。逆に言葉が違うからくだらないことだけで腹をかかえて笑ったり、わからなくても「わからなーい！」とかいって爆笑できたんだと思う。出発前はフィリピンのことはまったくわからず、MTG で話聞いても想像もでなかった。全く知らない世界で何ができるんだろう。どうやって壁をなくせるんだろう。正直日本で遊んでたほうが楽しんじゃねって思ったときもあった。けど、心から来てよかったと思った。不安もすぐ忘れた。徐々に自分の名前を呼んでくれる人が増えていく。フェアウェルのあいさつで「アコシー？」って言うとみんな迷いなく「しぇーい！」って返してくれた。もうしぇいを本名にしてもいいと思った。別れの日も「ミンガオ～（I miss you)」とか言いながら乳首をつねりあったりしていた。壁なんてもともとないんだ。勝手に自分たちで壁を作っていただけなんだ。

今回のキャンプでボランティアについても新たに考え直すことができた。自分たちが与えるだけだったらボランティアって意味がないんだと思う。お互いに与え合ったからこそもらったものを大切にし、一時的なものを永遠なものにできるんじゃないかって思う。今回もただ道を作っただけだったら雨とかでまたもとのドロドロ道になると思う。でも「あいつらと作った道だ。」「あいつらがまた来て喜んでくれるように。」って絆があればメンテナンスとかもしてもとに戻ることはないんじゃないか。

フィリピンに行ってみていろんな考え方を知った。まだなにが答えなのかわからない。というよりもまずなぜ自分がフィリピンで活動しているのかもわからない。わざわざ高いお金を出してなぜ遠いフィリピンまで行くんだろう。なにがしたいんだろう。これからはその答えを見つけていきたい。あ、でも、次フィリピンに帰る理由はわかった。またみんなに会いたいな。

♀あやな

このフィリキャンは私にとって始めての海外で、不安もあったけれど不安よりもわくわくした気持ちでいっぱいだった。到着初日のウェルカムパーティーではまだ会ったばかりの村のみんながたくさん話しかけてくれて名前も覚えてくれてすぐに打ち解けることができた。キャンプの感想を一言で表すと「とにかく楽しかった！」行く前には長いと思っていた一ヶ月も本当にあっという間でとても濃いものだった。キャンプで日本がいかに恵まれているかということや物質的な豊かさが幸せなんかじゃないということなど多くのことに気づくことができた。ワークキャンプをして村の人々に何かをしてあげたというよりもたくさんの物をもらったと思う。私にできることはちっぽけなことかもしれないけれど何か行動に移すことで、みんなで協力することで大きな力になるそんなことを感じたキャンプだった。フェアウェルパーティーなどで村の子供から大人までみんなが私たちにありがとうと言ってくれ、道のメンテナンスをこれからずっと続けていくと言ってくれたのは本当に嬉しかった。一ヶ月の間一緒に過ごしたキャンパーやマサバ村のみんな、このキャンプで出会ったすべての人に感謝している。Daghan salamat. 私の第二の故郷になったフィリピン。絶対にもう一度、いや一度と言わずに何度でも帰りたい！

♀しほ

今まで海外に行ったことなかったし、フィリピンがどんなところかも正直いまいち分からなかった。そのためか、MTG が進んで出発当日になっても、不安どころか想像すらついていなかった。セブに着いて、フィリピン独特の匂いのする空気を肌で感じたとき、やっと自分が知らない土地に来たんだと実感した。

マサバでの生活は色んなことが新鮮だった。たくさんのヤシの木、早朝から聴こえてくる、家が壊れるんじゃないかと思うくらい大音量の音楽、鶏の鳴き声、カラバオのふん…。おっちゃんたちは昼間でも働いていてもお酒を飲むし、ちびっこたちは「シホ！バホ！」と叫んでくる。外を歩くとお母さんたちがごはんを食べさせてくれるし、夜になればテレビを見るために家に近所の子たちが集まってきた。まるで村全体が１つの家族みたいで、自分もその家族の一員になれた気がして嬉しかった。最初に来たときは知らない土地だったのが、最後にはまた帰ってきたい場所に変わっていた。

こんなに毎日が楽しくて、時間が経つのが惜しいとまで思えたのは、「ボランティア」という感覚が

全くなかったからだと思う。フィリピンに行く前、よく私の周りの人たちは「ボランティアなんてすごいね！」と言っていた。正直、私はこの言葉が好きじゃない。善いことをするとか何かしてあげるとか、偽善で上から目線な感じがするから。マサバでの生活はそんなんじゃない。村の人と同じ場所で生活して、一緒に働いて、遊んで、笑って、泣いて、たまに怒って、そして感動して…。自分が何かするよりも、してもらうことの方がずっと多く、毎日数えきれないくらい Salamat と言った。このワークキャンプに参加して本当に良かったと思う。

最後に、まさえ、はるか、りょーへいを始め、キャンパーのみんな！国内係をしてくれたみかこ！ちょうの周りにいる人たち！(笑) 本当にありがとう(*^ω^*) みんな大好き！

♀はらちゃん

私は今回フィリピンキャンプに初めて参加した。自分にとって、初めてのワークキャンプ、初めての海外、親元を１か月離れて生活するのも初めて。初めてのことがいっぱいで、出発前は楽しみな反面不安もいっぱいあった。でも、フィリピンに到着して、初めて日本と違う空気を感じて、いろんな新しいものを見て聞いて、日本と違うところ、同じところにいちいちびっくりして、最初の方はただただ驚いて感動して関心して、日本での生活とは全く違う環境に慣れるのに精いっぱいだった気がする。村での生活に慣れてきたら、村人との交流やワーク、キャンパーたちとの話し合いの中で、新たにいろんなことに気付いた。自分はワークキャンプの意味や目的を全然わかってなかったし、それ以前に考えてすらいなかったということ。村の人たちの日本人に対する気遣いや思い。日本は先進国で、フィリピンは発展途上国だということ。日本での“当たり前”の生活のありがたみ。フィリキャンに行ってよかったことの１つは、自分なりに何かに気付けたところだと思う。フィリピンに行ってから、今まで自分が持っていたいろんなものに対するイメージが変わった。実際に行ってみるってすごく大切なことだって実感した。フィリピンでの１か月は、“楽しい”とか“充実してた”じゃ収まりきらんくらい濃い１か月だった。みんなでワークして、いっぱい遊んで、しゃべって笑って、一緒にご飯食べて、お酒飲んで、歌うたって、ディスコで踊って…幸せな思い出がいっぱいできた。マサバ村で過ごせたこと、マサバ村の人たちに会えたこと、もう一つの家族ができたこと、友達がいっぱい増えたこと、キャンパーのみんなと共に過ごせたこと、もうキャンプに参加できたこと自体が本当に嬉しい。関わってくれたいろんな人に心から感謝したい。こんな日本の大学生が他の国の人に影響を与えて、一緒に何かをするってすごいことだと思う。ワークキャンプのこと、フィリピンのこと、これからも学んでいきたいと思う。フィリキャン行って本当によかった‼また絶対マサバのみんなに会いに行きたい‼

♀なつき

初めての海外、初めてのFIWCとしてのボランティア活動――今回のワークキャンプは初めて体験することばかりだった。期待もたくさんあったが、それと同じくらい不安もあった。フィリピンへ行くまでは、“ボランティア”とは助けを求めている人たちに私たちが一方的に何かをしてあげること、助けてあげることだと考えていたが、実際にフィリピンへ行って、ワークをして、村人と交流して、“ボランティア”とは、与えることよりも得るもののほうが多いということを感じた。

今回ワークキャンプに参加して本当によかったと心から思う。フィリピン人と日本人は、言語はもちろん宗教、文化など、違う所がたくさんあるが、そんな壁を感じないくらい、まるでずっと一緒に暮らしてきたと思うくらい村人と打ち解けられた。子供からお年寄りまで、村人はとても温かかくて、毎日一緒にお話ししたり、一緒にワークしたり、村人と交流することがなにより楽しかった。実際にフィリピンへ行き、一カ月弱生活をして、言葉や文章では表せられないが、自分の中で感じたこと、考えたことがたくさんあった。村人から「次はいつ帰ってくるの？」と聞かれるとうれしくてたまらなかった。これが噂の“第二の故郷ができる”ということか、実感した。

帰国してから毎日フィリピンでの写真を見る、しょっちゅうフィリピンの夢を見る、日常生活でビサヤ語が出てくる…すっかりフィリピン依存症になってしまった。

♀なお

マサバの風景や村人の笑顔を今でも鮮明に思い浮かべることができる。この１ヶ月は本当に充実していて幸せで、私にとってかけがえのないものになった。

何よりも楽しかったのが、村人との交流だった。確かにワーク成功のためにも村人と仲良くなることが重要だと聞いていたけれど、今になって考えてみると私はただマサバの村人たちの温かさや陽気なところに惹かれてもっと話してみたい、仲良くなりたいという思いで自然と打ち解けていた。本当に何がきっかけであんなに仲良くなったのだろうかと思う。いつの間にかマサバの村人を、そしてマサバ全体を大好きになっていた。村人といると、くだらないことで大笑いできたし、その日のワークを終えた達成感も何倍にもなったし、疲れているときでもがんばろうと思えた。村人とキャンパー、みんなが集まれば大きな力になると思った。言葉、考え方、環境などが異なっていても、多くの時間や感情を共有して、自分を素直に出すことで、通じ合うことができると感動した。

このワークキャンプはとにかく楽しくて、同時に人の温かみを感じた１ヶ月でもあった。日本ほど便利な生活とは言えないけれど、いつもどこかに人が集まっていて笑顔で溢れていた。あんなに素晴らしい村でのワークキャンプに参加することができて心からよかったと思う。マサバの村人と出会い通じ合って、このように今までになかったことをたくさん感じた。今後も人との出会いを大切にしていきたい。

何人もの村人に感謝されたけれど、私たちもこの１ヶ月でたくさんのことを得ることができて感謝しているわけで、お互いに良い関係だったのだと思った。普段は生意気でからかい合いをしていた子どもたちがfarewell party で「いつ戻ってくる？」「泣かないで」「フィリピンと日本はすごくすごくすごくいい友達だよ」と寂しそうに言っていたのを思い出すと会いたくてたまらなくなる。マサバが私にとって大切な存在であることはこれからもずっと変わらない。いつかまた絶対マサバに行く‼

最後に関わってくれた全ての人に感謝したい。ありがとうございました！

♀ありさ

フィリピンといえばバナナ、最初は本当にそんなイメージしか持っていなかった。本隊（キャンプ未経験者のみ）だったので「見知らぬ地に自分達だけで大丈夫だろうか…」と行く最中は不安もあった。だから FIWC と書いた紙を持って待ってくれていたキャンパーを見た時には涙が出そうなくらい安心した。翌日には軽トラの後ろからフィリピンの景色を楽しむ余裕もできた。ようやく村に着き、久々な先発のキャンパーの皆は随分たくましくなっていた。滞在したマサバ村ではビサヤ語と英語を混ぜて話した。簡単なビサヤ語を言った時に見せてくれる笑顔がただ嬉しくて「英語が伝わらないと嘆くのではなく、むしろこっちが現地語を覚えて話してやるぞ！！」という気持ちが湧いた。相手の国の言葉を覚えようとすること程、村の人とグッと距離が近付ける方法はない。なぜなら、教えてもらうことで既にもう村人とは会話が成立しているから。マサバ村は“まるでジュラシックパーク”のような森に囲まれ、鶏や犬が村の生活に溶け込み共生している村だった。（因みにカカオはここの特産物！）フィリピンの主食は日本と同じく米でご飯がビックリするくらい進んだ。「まだ食べるの？！」とよく言われたが、カエルが朝食で出た時、それの話は別…。毎朝ノリノリの音楽か鶏で起床、本当に楽しかった。村全体で私たちを歓迎してくれ、本当の家族のように接してくれた。ずっと小さい子に囲まれて生活したり、同年代の子と語り合う事が最高の夜更かしだった。子ども達が自由に家の垣根を越えて遊びに来たりする母国の当たり前を当たり前として生きない生活。常識なんて国境を越えればすぐに覆される。Be honest. 大事のなは飾らないありのままの自分と向き合うこと。皆のこと、私は決して忘れないよ。Salamat.いつかまた会いに行くね。

♂よしけん

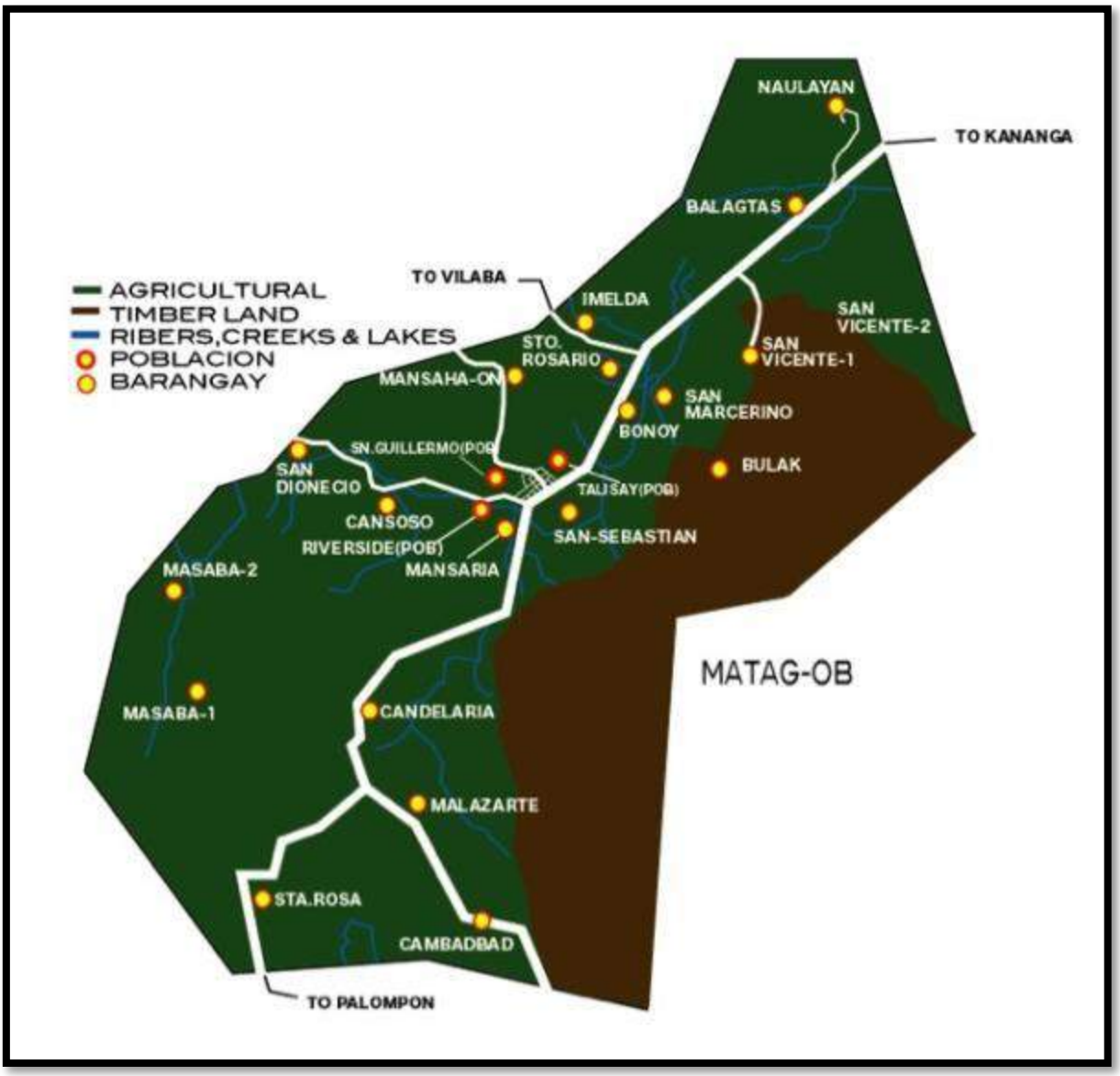
日本を出発する前は、１か月も日本を離れ見知らぬ土地で過ごすということに対して楽しみよりも不安のほうが大きかった。村に着いても最初は言葉が通じなかったり、どう接していいのか分からなかったりして村人との間に壁を感じている自分がいた。でも昼は汗を流してワークして、夜はお酒を飲んだりしているうちに自分の中で感じていた壁も消えていった。自分の言語能力が極端に上がったりしたわけでもないのに、気づけば村人たちと一緒に笑いあえるようになっていた。一緒に過ごす中で壁が壊れていったというよりも、自分が勝手に感じていただけで壁なんてもともとなかったのだと思える。言葉が通じないことはコミュニケーションを図るうえで大きな障害になりうるだろうけど、今回のフィリピンキャンプで言語を超えたつながりがあるのだと身をもって知ることができた。

それだけでなくフィリピンでの１か月は今までにはないようなことをたくさん経験できた。自分はボランティアとは無縁な生活を送ってきたけども、このフィリピンキャンプはボランティアというだけでは物足りないくらい大きなものだと感じた。ボランティアは「何かしてあげる」という意味合いが強いだろうけど、フィリピンキャンプは「一緒に成し遂げる」という感じがしてやっていて楽しかった。

日本に帰ってきてからフィリピンという地が自分にとって特別になっていた。フィリピンが恋しく思うし、またあの地に戻りたいとも思う。そしてフィリピンでの１か月は今まで生きてきた１９年間において最も中身の濃い１か月だったといっても過言ではないだろう。

２０１２年　FIWC 九州フィリピンキャンプ参加メンバー

青木雅詠	（西南大学２年）	岡崎遥	（九州大学２年）
加登僚平	（九州大学２年）	仮屋薗侑大	（九州大学４年）
寺下進	（九州大学２年）	岩辺かんな	（西南大学１年）
杉田隼人	（九州大学３年）	林大愛樹	（九州大学３年）
松本巡	（武蔵野大学２年）	浦田菖平	（九州大学１年）
長志保	（西南大学１年）	原美咲	（九州大学１年）
松永彩菜	（九州大学１年）	神尾夏季	（西南大学１年）
堂地由緒	（西南大学１年）	上野有彩	（西南大学１年）
吉田健吾	（九州大学１年）		



FIWC 九州（代表：青木雅詠）
Mail: fiwcq@hotmail.com
Web: http://fiwckyushu.web.fc2.com/
（FIWC 九州公式サイト）
Twitter:@fiwckyushu
Blog: http://fiwcqp.exblog.jp/
(フィリピンキャンプ最新情報))